

話題100： 新型コロナウイルスが語っていること

長年の公務員生活に別れを告げた際に、国立病院機構沖繩病院のホームページに「名誉院長室の窓から」と題するコーナーを設けてもらった。約10年前に出版した拙著「医者目で見えた患者学」、それ以降の思いを折りに触れて綴ってきた。

テーマが100台に達した今日この頃、そろそろまとめの文章をと考えていた矢先に、突然に降って湧いた「新型コロナウイルス」の嵐である。このパンデミックに関する論文が散見される。要旨のみを抜き出して、事態をどのように捉えるかを整理しておきたい。

イギリスの地理学者デビッド・ハーブエイは語る。「真の自然災害は存在しない」と。戦争どころではない、この今の状況は、過去の半世紀にわたって徹底的に虐待されてきた「自然からの復讐」であると説明している。

青春時代を過ごした名護の街。名護湾を縁取る長い砂浜。そこには、若者に夢を見させるには十分すぎる自然があった。水平線、沈む夕陽。埋め立てられ、今では、姿を変えた海岸線とシャッター街が残る。

屋部の村に散歩のできる砂浜が残されている。ゴミ袋を携えての散歩。健康管理を兼ねて往復で約50分。拾った空き缶、ペットボトルで袋はいっぱいになる。雨の後は、さらに酷い。川から流れついた廃棄物が散乱し、海も土色に染まる。

計画性のない開拓と自然破壊。そして、その結果が表現され窺える。それでも波は、陸地を洗う、ゴシゴシと。自然は、復讐のみでなく修復をも願っているようにも思える。

教皇フランシスコの言葉である。現象は、「自然の報復なのかは分からないが、自然からの応答であることは間違いない」・・・と。そして、付け加える。「神はいつも赦し、人間は時折赦すが、自然は決して許さない」と。過去に対する反省と修正が求められている。

新型コロナウイルス感染に対する治療法の研究、健康管理、経済的な問題は喫緊の課題である。加えて、現代社会に提示された課題、家庭、環境、貧困、人権、民族、国家および国家間の問題があり、それらが同じ根本問題に起因しているとの指摘がある。

「新自由主義」と表現される経済最優先の政策は大企業、富裕層を優先し、弱い立場にある者を置き去りにしてきた。再燃、加速する「領土」に対する確執。人間の欲望は宇宙にまで広がる様相を見せる。

身近には自己が、地域においてはその場が、さらには自国が、その人種、民族が有利になる条件であれば全て「良し」とする風潮にあり、また、政治がある。

自らを含めて、すべてが自然の一部であることの基盤のもとに、謙虚に、自然に向き合わなければならない。「その時」が来たのではないかと指摘されている。

沖縄県の北部。高台にある老健施設の窓から名護湾の全景が見渡せる。混沌とした世相と時の流れが見えてくる。限りない、人間の欲望の渦が見えてくる。

施設の窓の内側には、悲喜こもごもの人生の物語が演じられている。窓を閉ざすと、平和な静かな光景が浮かんでくる。毎日の窓の開け閉めによって、外の空気が流れ込み、今日もまた、新たな物語が展開されていく。

すべてに・・・感謝。